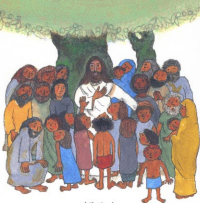


しんやくせいしょものがたり

# 新約聖書物語

文 脇田晶子 絵 小野かおる



女子の会

しんやくせいしょものがたり

# 新約聖書物語

文 藤田 晶子 絵 小野かおる



女子パウロ会

またある

イエスの誕生

先がけとなるヨハネの誕生の知らせ

み使いがマリヤのところに来た

信じた人はしあわせ

ヨハネの誕生

ヨセフの見た夢

聖霊がビテの胎へマリヤへ働きして

かいはおほにねかされた神の御ん手

イエスのはじめの宮まいり

遠い国から神々に来た人びと

王のわるはくみものが来て

十二歳の上りの宮まいり

宣教師のはじめ

ヨルダン川のほとりに聖言者があらわれた

イエスはヨハネの洗礼を受けた

ある時々のサタンのごころみ

説教のそしがついてくる

イエスをとりまく人びと

カナの町でけっこん式があった

宮を造る

こころと腹を働かせるためにコナを

洗礼するヨハネが土にさらされる

マリヤの神戸のそばで

ザリザリをめぐって

ザリザリをめぐって

旅費が乏しい人たちは信じない

カファルナウムの町の御ん手

ふしぎな大漁

人びとの苦しみをほろけておけないイエス

イエスに信じてくれる人びと

あの人は神をゆるす

あの人は神びとの配だち

あの人は聖書を守るをない

あの人は、神をわたしの配という

人びとは聖書の正

## まえがき



「時代」の如く、いまに書かれた時代からまもなく、地中海のまわりの國々に、みなローマ帝國の方におさえられていました。

ローマ帝國は、イドマヤ人のヘロデヤキエスエル人の地ユダヤの國の主として立てました。ですから、ヘロデヤキエスの主とはいっても、ユダヤ國民のためを思うより、ローマ帝國のさげしんをとることのほうがたいはつにしました。ほんとうのユダヤ人(イスラエル人、ヘブライ人)は、このイドマヤ人とローマ人との二重の支配にたいへん苦しんで、神さまに助けられたのである諸君たち、外國人の支配の下で苦しませられはならないことを願ひました。

人びとは、むかしのダビデ王やソロモン王のすばらしかつた時代をなつかしく思い、ダビデの子孫から、いつか、すばらしい王、キリストが現はるといふ、神さまの約束が實現される日を、いまか、いまかと、待ちおぼせていました。

キリストとは、神さまから遣はれてとうとう、世をそがれた人といふので、旧約聖書には、神さまから命じられて、預言者サムエルがサウルのダビデに神さまをそいで王にしたことが出ています。



これから説明しなくては、イエスの生涯を新約聖書のなかの四つの福音書をもとに読みかたてますが、できるかぎり福音書の地圖をそのまゝ、やさしいことばにしたいと思ひます。福音とは、神さまからわたしたち人類にあたえられた、よい知らせ、といういふので、四つの福音書は、傳いたといわれる人の各まゝから、それぞれマタイ福音書、マルコ福音書、ルカ福音書、ヨハネ福音書とよびます。

この人たちはイエスが語られたこと、なされたことをその時代の人びとに知らせるために書いたので、ヨハネが最後についているように、イエスがなさったことは、このほかにもまだまだたくさんあり、もし一つひとつ書くなら、書庫もその本をのぞききれない、でしょうから、そのほか、だれに、何を、どう伝えようかと、と考へています。ちょうど一つの福音書にいろいろの方言から、光をあてたように、ある人はいっています。だから、いろいろの地圖をまぜあわせて書くことこの地圖と取り一つの地圖にじっくりかまるといふことはむずかしい、できないので、そののとおりこの地圖を、いま、神さまからわたしたちに書ける、よい知らせ」として読みましょう。



# イエスの誕生

十 天がけとなるヨハネの誕生の知らせ

ユダヤの國の船エルサレムの町に、ユダヤ人にとっては、王の都というよりも、神さまの都です。町の町が、シロンの山に、イスタル山の麓のすばらしい宮がそびえていました。そこで、年じゅう、朝も夜も、お祈りの祭りが夜に神さまを拜み、いけにえをささげて奉仕していました。

そのころ、祭りのひときにザカリヤという人がいました。この人も聖のエリサベトも、神さまをとりとよほしい人でしたが、いくら神さまに祈っても子どもが生まれません、さびしくくらくしていたのです。

ある日のこと、朝早くをたぐつとめにあたって、ザカリヤはひとりで聖地に入っていました。見ると、聖地の扉に天使が立っています。そして、おどろくザカリヤに声をかけました。

「おそれなす、あなたはいのりは賜われられた。エリサベトは子どもをむ、あなたも、その子にヨハネという名をつけなさい。その子に、エリサベトのような聖地信になり、一生、神さまに仕え、神さまの御に候たされて、聖い聖の光がけとなるだろう。」

ザカリヤは自分の耳をうたがいました。

「わたしはこのとおり、もう十年間、聖も御はあきらんたっています。どうしていまになって子どもが生まれぬだろうか。——」

そして、ザカリヤはいいました。

「ほんとうでしょうか、どうしてそれがわかりましたか？」

すると、天使はいいました。

「どうしてわかるかというのか、わたしは、天啓がマリエルである、神が来れば御見するわたしのことを告げなかつたので、いまからあなたの口はきげなくなり、このことは御隠すまで、隠すことにはできない。」

天使は酒をました、はつとわれじをえって、ザカリヤが聖地を去ると、夜では人びとがザカリヤのおそいのをふしぎに思ひながら持っていました。ザカリヤは驚かしようとしたが神がけは人びとをしますますおどろくばかりでした。

## 中 天使がマリヤのところに来た

ユダヤの國は、大きく二つの地方に分かれますが、いちばん東のガリラヤ地方に、ナザレという小さな町があつて、そこにマリヤという少女が住んでいました。たふん十四、五歳だったでしょう、同じ町のおかい大工、ヨセフとけこの約婚をかわしていました。婚約には書いてありませんが、伝説によると、マリヤは心も神さまにおささげして、神さまだけのために生きる生活を送っていました。ヨセフも神さまに仕えをことをなによりも大切に思え、きつぱな男婦でした。

ふたりがしあわせな男婦でも、けこのの目持っていた、ある日のことです。とうぜん、天啓がマリヤの家にあらわれたのです。聖地ザカリヤに天使があらわれてからさしたつてい



ました。

「天使はマリヤに会いさつしました。

「お喜びください、神さまのめぐみでいつばいのかた、御はあなたをともにいるっしやいます。あなたはそのなかでだれよりもしあわせなかたです。」

「マリヤはこのようにあいきつひつくりしな、天使いそはつぬました。天使はつづけていました。

「おそれることはありません、あなたはい、神さまから大きなめぐみをおいたたかれました。あなたから、ひとりのお子さまが生まれるになります。イエスというおなまえをつけてください。すばらしいおかたです。神のおみことよばれるでしょう。神さまが、マリアの子孫からいつまでも王となるかたが生まれると、御聖書のたのは、このお子さまのことです。」

「マリヤはいいました。

「でも、わたしは、神も何も神さまにおきさけしようともありません。どうして子どもが生まれるでしょうと。」

「マリヤは、

「神さまの力です、ですから、そのかたは神のおみことよばれるのです。あなたのおしんせいのエリサベトも、あなたを伴っているのに、神さまのめぐみで、まもなく男の子を産みますよ。神さまにおてきにならないことはありません。」

「マリヤは神聖いのことばを信じました。

「わたしは、神さまのものをさかします。お聖みどおりなりますように。」

「天使のすがたは、このと終りました。」

### 中絶した人はいまも

「いくはちた女をいかりに、マリヤは、エリサベトをたすけようと思いたちました。みづには、あの聖とつたエリサベトにも、子どもが生まれるといつたてはありません。エリサベトは、すつと神のめぐみおさとに信じ、いそかに信じていました。

「マリヤはいそいで信じてました。二日後、四日の後です。マリヤは、遠くへなを歩きたかたのすけうか、小まいたきから、二回ほど歩道をくりかえし、りかえし、神聖にしましたから、みづいゆことばと神聖のことばを、いろいろと覚えあわせなことでしよう。マリヤにも、わかぬこととはたくさんありました。神さまのめぐみは、まだまじかきられています。でもマリヤは、深い信仰をもつて、すべてをおまかせするのです。

「マリヤがエリサベトの聖についてあいきつたとき、エリサベトは、おなかのなかで眠らばうか喜びをだつたように感じました。同時に、マリヤが深い信仰に選ばれたことがわかったのです。エ

リサベトは走りよっていいました。

「ああ、あの人のなかでどれよりもめづられたかた、あなたのなかに留められたお人子も、めぐみに満ちていらつしやる。わたしのよきな教が、なぞ、主の御たまの御言葉をいれたのでしよう。もつたいないことです。あなたのおいさつが御たまの御たま、わたしの子に、わたしのあなたをかでおどりました。御たまのおことは御たまあなたはいはれませ。」

マリアの口からも、心の喜びが、しぜんに歌となつてあふれてきました。

「わたしのたましいは、御たまをたたく。」

わたしの心は、

喜びでいらつしやる御たまのおかげで喜びおどります。

御たまは、このめしつかいのわたしに、

お目をあけてくださいました。

いまから、いつまでも、人びとは

わたしを、しあわせな者とおぼでしよう。

なんでもおできになるお方だ。

わたしにすばらしいことをしててくださいました。

御たまのあわれみ、いつくしみは、

御たまをとうとぶ人のおんに、いつまでも。」

#### 中世の人の生活

マリアは、それから三か月、エリサベトの子どもが生まれるまで、そこにたどらなつてこられた。

エリサベトは、腹の子を産みました。産婦の人やしんせきも、御たまがやつとエリサベトに子どもを授けてくださったといつて、お祝いにやつてきました。

マリアはあんなにうれしかった。子どもに中世の人を産ませました。すると、マリアは、十分にあきらめるやうになり、おどろいている人びとの間で、産婦の歌をうたいました。

「ああ、エリサベトの御たまはたまたま。」

御たま、マリアの腹に授けられたので、

御たまの御たまを授けられたので、

むかしむかしから、御たまを御たまに授けて、

わたしたちの御たまに御たまを授けた、その御たまにおどろ、

わたしたちを御たまから授けて、

平時に御たまを授けるやうにしてください。

おまへこと、おまへは御たまの御たまをよばれるがう。

おまへは、御たまの御たまに御たまを授けて、わたしたちの御たまを授けて、

御たまの御たまを授けて、

御たまと御たまの御たまを授けて、

御たまと御たまの御たまを授けて、

御たまと御たまの御たまを授けて、

御たまと御たまの御たまを授けて、